

恵夫妻が講演。孤独な境涯を脱し、心豊かに亡くなったといった入居者の思い出を語った。

身寄りも行き場もなく末期の病を得た人たちに寄り添って7年半、111人を看取ってきた山本夫妻。美恵さんは「死は肉体の卒業で、魂の故郷に帰ること。よくがんばったね、おめでとう、お疲れ様、という言葉が自然に出るようになった」と振り返った。

自分の死を考える集い 「希望」に満ちた死 山谷の支援者話す

〃今を輝いて生きるために、『死』を視野に〃をテーマとする市民学習会・第14回「三鷹 自分の死を考える集い」が4月25日、東京・三鷹市の市民協働センターで開かれ、65人が参加した。高齢化が進む日雇い労働者の町・山谷で、在宅型ホスпис「きぼうのいえ」を運営する山本雅基・美

脳梗塞の後遺症や糖尿病の末期を患っていた「意地悪ばあちゃん」は、血糖値が下がり失神する毎日。ところがある日、「もういつ死んでもいい。みんなに愛されてるのがわかったから」と感謝の人に変わったという。

雅基さんは「輝くような笑顔で亡くなった」男性を追想し、「死生観の逆転」について話した。